

生成と展示をめぐるコラージュ

— 1920年代から40年代初頭におけるマックス・エルンストのコラージュの展開—

石井 祐子

マックス・エルンスト（1891-1976年）は、ドイツに生まれダダイズムの中心的作家として活躍した後パリへ渡り、20世紀最大の芸術運動のひとつであるシュルレアリスムの視覚芸術の分野の中核を担った人物である。第二次世界大戦期にはアメリカへ亡命して抽象表現主義とも関わっており、その画業と作品群は豊かな多様性に満ちている。そして、常に異郷に生き、その作品制作を変転させ続けたエルンストの画業の中でも、最も重要な技法・理念として彼のコラージュが挙げられる。発表者の博士論文は、エルンストを取り巻く文化的コンテキストや言説の展開の中に彼のコラージュを位置付け、その理念や意義が如何に変容しつつ形成されたのかを考察するものである。

特に本論では、上記の観点からのみならず、従来あまり注目されてこなかったその展示の問題との関係を念頭に置いて議論を進める。なぜなら、作品の制作は作品の展示の問題と切り離せず、両者はダイナミックな相互関係の中で成立しているからである。よって、本論文では、エルンストのコラージュ作品の具体的な作品分析のみならず、彼のコラージュが、展覧会という場で如何に提示されたのか（あるいは展示されなかったのか）を考察し、それを支える理念やコンテキストの展開、更にはその展示の在り方を精察する。

本論文は、第一章から第四章における議論に、序と結を加えた六部から成っている。第一章では、1921年にパリで開催されたエルンスト展を手掛かりに、エルンストの初期作例をめぐるコラージュ論の形成と、彼の展覧会活動におけるコラージュ展示の問題について考察する。ここでは主に、ブルトンによるシュルレアリスム論との関わりに着目し、初期のコラージュの議論が「シュルレアリスムの絵画」の模索と形成・展開とに複雑に絡み合い、揺れ動いていたことを明らかにする。特にブルトンの言説は、コラージュという営みにおける生成のプロセスのダイナミズムと、そこから継起する捉え難いイメージの固定化＝作品化との間の浮動を抱え込んでいた。ここには、ブルトンがシュルレアリスム的な絵画の問題として、矛盾するイメージ同士の唐突な出会いから未だ実現しえない至高点へと移動・脱走がもたらされるという弁証法的・抽象的理念を掲げていた一方で、「シュルレアリスム絵画」の存在を証す作品をより具体的に語る必要があったという当時の状況も関与しているだろう。そして、1920年代後半のエルンストのコラージュ作品展示の状況は、こうした揺らぎと軌を一にしていた。

第二章では、特にアラゴンのコラージュ論を契機として、エルンストのコラージュをめぐる議論の深化を検討する。アラゴンは、捉え難いイメージを固定化することに明確な意義を見出したが、彼のコラージュ論はさらに、そうして完結した作品を、新たな生成、すなわち再・生成へと拓いてゆく可能性を内包していた。その可能性は、書物の形態をとるエルンストのコラージュ・ロマン等の作品を巻き込み、その議論の射程を押し広げたと言えるだろう。本章ではさらに、30年代のシュルレアリスムの国際化とそれに伴う展覧会活動の隆盛を確認する。以上の考察によって、エルンストのコラージュが定式化されると同時に、汎用性や拡散がもたらされ、コラージュの手法をめぐるずれや主体性の転移が露呈する様を検証する。

続く第三章では、アメリカ亡命後のエルンストの活動に目を転じ、同地で彼を取り巻いていた文化的コンテキストと作品制作・展示との関連を論じる。本章では特に、1943年に亡命先アメリカで制作された《Vox Angelica》を中心に、当時のエルンストの制作・作品が内包する自己省察性を考察する。そして、同作品を当時のアメリカという特異な文化的磁場のみならず、両大戦間期から続くコラージュをめぐる展開の中に位置付けることによって、それがコラージュの体験そのものを提示する新たな生成物としての意義を担っていたことを指摘する。

第四章では、それまでの議論を通じて提起された「グリッド」の問題について更なる考察を加え、エルンストのコラージュをより多角的に検討する。特に、グリッドによる画面分割を抽象表現主義とシュルレアリスムの双方の作例から考察し、従来モダニズムの文脈から語られることが多かったグリッドの多義性を明らかにする。また、グリッドによる画面構成によって提示される相矛盾したイメージの並置（「葛藤の展示」）が、「新しい神話」という理念に基づいていたことを指摘し、その理念の諸相を検討する。

以上の考察から明らかとなるのは、謂わばひとつの螺旋状の円環である。すなわち、初期のコラージュでは、既成の図版という生成物をコラージュという生成のプロセスへと導く運動性が重視されたのに対し、30年代のコラージュでは、その結果として生成された生成物＝作品を新たな再生成へと開放するというプロセスがみられるようになる。さらに《Vox Angelica》によって、コラージュの体験それ自体を喚起する既成のイメージを提示するに至るという展開が見出せるのである。ゆえに、エルンストの生成と展示をめぐるコラージュは、40年代初頭に新たな始まりへと降り立ったと言えるだろう。